

# 反障害通信

24. 8. 18

155号

## 反「環境破壊」ということ

そもそもわたしたちは地球で生きていて、環境破壊が進んでいけば生きていけなくなります。環境破壊は、未来に生きるひとたちの生きる条件への収奪という差別であり、それが如実になっている中で、政治的無関心とされている若者の立ち上がりがあり、社会を変えていく原動力になっていくのではないかという期待も持たれています。

### 「環境問題」と科学

この「環境破壊」については色んな警鐘がなされてきて、なされています。かなり膨大な書が出され、論文になるとかなりの量です。ですが、そもそも、科学ということは分かっていることよりも分からないことが多く、また、明らかに虚偽と思われることも、その「虚偽」であることの立証や、それが広く理解されることのむずかしさもあります。そもそも科学の発達による自然の支配など夢想していたところから、「プロメテウスの罠」に嵌まってしまったのです。「環境問題」を論じるには、この科学で論じて行かざるを得ない、という悖理があるのです。また、絶対的真理なるものは論理的にありえず、そもそもひとは論理的に生きているわけではありません。トランプ支持のひとたちには、地球が球体状であることを否定するひとさえいます。おまけに右派の歴史修正主義者の中には、あったことをなかったこととして主張してくるひとさえ出てきます。そういう中で、何が問題になっているのか、議論を深めひとつひとつ解き明かしつつ、それを広めていく作業をしていくしかないのです。

### 政府のネグレクト

そういう中でも、「環境破壊」ということは、政府や国連での地球温暖化にたいするSDGsという取り組みとして、世界的に承認されているようにもとらえられます。

ですが、トランプの陰謀論的な「地球温暖化虚偽説」の主張のみならず、そもそも国際的な取り決めさえも一端承認されたものが政権交代で覆ることのみならず、そもそも政府のほとんどがやっているふりの、政権維持のために目標を掲げているだけという風潮があり、グローバルゼーションの進行の中で、市場がなくなり産業が行き詰まるところで、新しい産業の創出というところで、SDGsを掲げているのではないかと想起させる情況さえとらえられています。

そもそも資本主義の精神は「我が亡き後に洪水よ来たれ」と言われているように、今の社会の支配層は、金儲けしか考えていないととらえられる動きさえ示しています。そしてそれを規制するはずの政府が金権政治で企業への規制をちゃんとやっていないばかりか、むしろ規制緩和などを突き出している始末です。様々な「公害」「薬害」ということが、隠蔽ということが長年頻繁におこなわれ、被害が出てから、それが如実になってからの後手後手の対応をしてきた歴史があります。

さて、もうひとつの問題、科学がそもそもわからないことの方が多いというだけでなく、そもそも、科学の名による「環境破壊」運動ということへの抑圧的情况さえあります。フクシマ原発事故が起きる前に、「原発が危ないというのは、非科学的だ」という発言をしているタレントがいたのですが、フクシマ原発事故の汚染水の海洋放出への海外からの批判に、日本の首相が「非科学的だ」という反批判をしていました。事故を起こしたのは日本の国で、過去の地震の際の津波の検証で、防波堤を越える可能性があるという指摘があったのに握りつぶし、非常用電源を低いところに置き、水没して使えなくなるというていらく、そもそも地震の多発する国で原発を作ること自体が非科学的、さらに事故を起こした沸騰水型の原発で言われているのは、「高々お湯を沸かすのに制御がむずかしい原子力発電などなぜ使うのだ」という指摘がなされています。また、そもそも放射性廃棄物の処理をどうしていくのかの予定も立てず、「トイレのないマンション」という状況を創り出しているという非科学性があります。よくも、自らの非論理性——非科学性をスポイルして、反批判できることだと、恥ずかし恐ろしい限りです。

### 民衆における「環境問題」意識

さて、フクシマ原発事故の後に、テレビで地元の若者たちが「もうわたしたちに未来はない」というような話をしているのを見ていました。その絶望感は、再稼働の動きの中で「絶望から総てが始まる」というサルトルの提言を思わせる官邸前行動と脱原発・反原発の運動として現れていたのですが、それでも、多くのひとは、沈黙したままで、そのうち、忘れていくという政府の思惑に沿った動きになってきています。それは、そもそも何かというと、どうせ反対しても事態は変わらない、政権が変わっても、たいして状況が変わりはしないというような意識が広く民衆をとらえていることがあります。それだけでなく、差別を問題にしている意識のある学者さえも、「市場経済はなくなるならない」「資本主義はなくなるならない」とかいう発言をしている事態があり、そういったところで、差別をモグラたたきのししか問題にできない状況になっているのです。それは、そもそも過去の「社会変革運動」の総括もきちんとなされないままに、社会変革運動を担う左翼が解体していった、解体的状況に陥ってしまったことがあるのです。今こそ、きちんとした総括の中で、新しい「社会変革への途」を見出して行かなくてはならないのです。

### 運動内の内部対立のようなこと

さらに、反「環境破壊」運動自身の中に、運動全体のことを考えないで、自分のやっている運動だけしか考えないで、また、自分が過去にやっていた言動や主張の正当化のために、他の反「環境破壊」運動や理論を批判し始め、そもそも何のために議論をしているのかの大極を忘れ、まるで宗派が自分の党派の拡大や、主張の拡大を求めるために他党派を批判し暴力的解体をしかけるというような、セクト主義的言動を繰り返し他党派解体戦略に自らの存在意義を見出したというような悪しき教条主義セクトのようなことに通底するような言動が起きているのです。そのようなことをきちんと批判して、反「環境破壊」運動が、民衆の命と生活に関わることとして、どういう新しい社会を作っていくのかの展望ももった運動として定立していくことが今、問われているのです。

(み)

(「反差別原論」への断章) (85) としても)

## 読書メモ

[廣松ノート(6)]の『物象化論の構図』にやっと入ります。「やっと」というのは、わたしの廣松理論の援用にとって、この物象化論が肝要として押さえているからです。

たわしの読書メモ・・ブログ 667 [廣松ノート(6)]

### ・廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 1983(1)

いよいよ、『物象化論の構図』に入ります。再読としてざっと読み上げ、『著作集』の高橋洋児さんの「解説」、文庫版の熊野純彦さん「解説」まで読んで、本著に戻ってもう一度読み直しながらメモ取りに入ります。

冒頭に「いよいよ」と書いたのは、わたしが廣松理論の学習に入っていったのは、反差別という処で総括と理論形成を進めようとしていたときに、「物象化」概念にあたり、これがわたしの反差別論のキー概念になるというところで、廣松さんの著作の読み込みに入っていた経緯があるからです。だから、この『物象化論の構図』と出会ったときには、まさに、これをベースにして反差別論を展開できるとの思いがありました。わたしが本を出版した後に、『情況』誌に載せて貰った「廣松渉物象化論の反障害論-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」にそのあたりのことについて書いています。

[hiromatubusho.pdf \(taica.info\)](http://hiromatubusho.pdf(taica.info))

廣松さんのこの著は、書き下ろし論文でなく、すでに掲載した論文に、「跋文」を書き加えた論文集になっています。尤も、廣松さんの単行本は、既に掲載した論文を集めたものが何冊もあります。その中でも、当初から体系的に書き始めたことを、あちこちの雑誌に掲載していて、それを集めて、それなりに体系的な一冊の本になっている(とわたしが押さえる)ものと、最初から一つずつ纏まった文になっているものを寄せ集めた(とわたしが押さえる)ものがあります。前者の典型的な例が『世界の共同主観的存在構造』で、後者の典型的な例が『事的世界観への前哨』です。『事的世界観への前哨』は、『著作集』で、バラバラにされて掲載されていることにも、それは見てとれます。この『物象化論の構図』は『著作集』でバラバラにされていず、『廣松渉著作集 第十三巻 物象化論』にまとめて掲載されていますが、「パッチワークの看を呈しており」xPと、多少廣松さん自身のいつもの「謙遜」的文でもあるのですが、著者がそれなりにそういう思いも持っていたことを書いていることにもそれは現れています。それは、「Ⅲ 歴史的世界の物象化論／一 商品世界の存在構造」とのつながりでしょうか？ 宇野経済学批判関係の論文と一緒に掲載されています。

さて、わたしの問題意識からすると、この論文集は、高橋さんの解説にあるところの、「廣松哲学における物象化の位置」という内容になっているのですが、そこで廣松さん自身が物象化論としていろいろなところで展開しているところで抜け落ちていることがあります。それは、わたしの中で、「物象化」という概念は「異化」という概念とリンクしたのですが、その異化ということがこの本の中で出てきません。それは、マルクスの物象化論と廣松物象化論の違いという問題にも通じる事です。高橋さんは「マルクス=廣松物象化論」という表記はしていますが、「=」ということに本文で？マークを付けています。文庫本の解説

者の熊野さんは「マルクス／廣松物象化論」という表記をしています。それを深化というか、発展期展開というか、はみ出しているとか、いろいろならえ方があるにせよ、「＝」でない内容は、廣松さんが、ゲシュタルト心理学の「図として浮かび上がる」という異化ということをとらえ返し、ソシユール言語論をもとらえ返したところで、命名判断的異化＝物象化をとらえ返したところから、物象化論を展開している側面があるのです。そのことがこの本の中で抜け落ちています。言語論的などころのとらえ返しが「言語的意味の物象化」143Pと、出てはいますが、「異化」の問題としての言及はありません。「異化」ということが反差別論にとって特に重要な概念になるのです。そのことは、「跋文」のサブタイトル「理論的拡張」としての、わたしの廣松物象論の援用としての反差別論的物象化論のとらえ返しの作業としての展開になるのです。

わたしにとって、物象化論批判の中身は、繰り返して展開される実体主義批判と異化という次元までとらえ返した物象化の批判なのです。

まず、目次です。この著への解説も付け加えています。

## 目 次

### 序 文

#### I 唯物史観の宣揚のために

- 第一節 古典哲学の弁証法的止揚
- 第二節 人間主義の超克と新地平
- 第三節 疎外論の止揚と物象化論

#### II 物象化論の構制と射程

- 第一節 社会的関係の物象化と文化形象の存在性格
- 第二節 歴史的動態の法則性と当事主体の有意行動
- 第三節 物象化批判の体系的な方法と価値評価の視座

#### III 歴史的世界の物象化論

##### 一 商品世界の存在構造

- (A) 商品世界の二重性
- (B) 価値理論の問題性
- (C) 商品価値の対象性
- (D) 商品存在の物神性
- (E) 商品世界の四肢性

##### 二 歴史的世界の存在構造

- (a) 情報的世界の二重性
- (b) 意味理論の問題性
- (c) 社会的行為の対象性
- (d) 自然的世界の歴史性
- (e) 歴史的世界の四肢性

#### IV 自然界の歴史的物象化

## V マルクスにおける哲学

### 跋文—物象化理論の拡張

#### 索引

この著は『廣松渉著作集』所収文と文庫版があり、そこに解説があります。

「解説 高橋洋児」(『廣松渉著作集 第十三巻 物象化論』岩波書店 1996 所収)

- 一 廣松哲学における物象化論の位置
- 二 一般理論としての物象化理論
- 三 マルクス＝廣松物象化論の特質
- 四 物象化論と弁証法および唯物史観との内的連関
- 五 物象化論の意義

「解説 マルクス／廣松の物象化論——途切れた意志の<かなた>へ—— 熊野純彦」  
(廣松渉『物象化論の構図』岩波書店(岩波現代文庫) 2001 所収)

さて、この著には、「序文」があり別編輯本で「解説」が二つ付いています。ですから、先に、「序文」やその「解説」の読書メモを書き始めればいいのですが、これまで、ほとんど切り抜きだけになってきていることの反省から、それは本著を読んだ後の作業にして、わたしなりの学習の積み重ねとしての展開・深化していくメモ取り作業として、もう既に解説を読んでいることを取り入れています。この著のアウトラインを示してみます。

まず、「I 唯物史観の宣揚のために」ですが、これは、廣松理論の入門書の『唯物史観の原像』の押さえ直しの章です。この流れは、廣松さんの「マルクス主義三部作」(『成立過程』『地平』『理路]) や、『青年マルクス論』、『エンゲルス論』、井上忠さんとの共著の『マルクスの思想圏』、また一連の青年ヘーゲル派研究などの初期マルクス研究とリンクすることで、『事的世界観への前哨』の時にやったように、「第二次以降の学習の時に、改めて読み直し、読書メモを書きます」とすることかもしれません。ですが、それでは第二次学習以降に入れたとしても、その作業自体がスイッチ・バック的作業になっていきます。こんなことを書いているのですが、そもそも第一次学習自体が、『存在と意味』にまで終わった時点で、もう1回読み直して、メモを取り直す作業が必要になっています。そもそも基礎学習が出来ていないことも勉強し直しながら、学習を進めていくと、100年どころの作業ではないスパーンの学習になります。更に、わたしのやっているのは実践のための理論で、とてもやりきれません。そんな思いの中で、この章は、必要最小限のメモとりに徹したいと思っています。ちなみに此の章で新しいところは、廣松さんが「疎外論から物象化論」というところで、疎外論批判しているところから、「疎外論自体の意義をとらえ直す必要がある」という提起をしているところをメモりたいと思っています。

次に「II 物象化論の構制と射程」がこの著の核心的部分です。しっかりとメモリ対話もしたいと思います。この章の最後は、物象化の止揚＝共産主義論・革命論の様相もっています。『新左翼運動の射程』や『現代革命論への模索』に通じるような論攷になっています。

さらに「III 歴史的世界の物象化論」「IV 自然界の歴史的物象化」ですが、マ

ルクス・レーニン主義、すなわち官許マルクス主義とか、ロシアマルクス主義とか言われる教科書では、Ⅲは史的唯物論、Ⅳは自然弁証法とか分類されるところですが、廣松さんは、「われわれは唯一の学[Wissenschaft=体系知]、歴史(「ゲンヒテ」のルビ)の学しか知らない。歴史は二つの側面から考察され、自然の歴史と人間の歴史とに区別されうる。両側面は、しかし、切り離すことはできない。」3P「自然観と歴史観とはもはや両半球的に併立すべくもないのであって、「歴史化された自然」の一総体を射程に入れる唯物史観が、世界観そのものと相覆う」71Pという押さえで、Ⅲの中の「二 歴史的世界の存在構造／(d) 自然的世界の歴史性」という項が出てきます。勿論、「二つの側面から考察され」る作業が必要になりますので、「Ⅳ 自然界の歴史的物象化」というところからの押さえも展開しています。なお、Ⅲの「一 商品世界の存在構造」は『資本論の哲学』や共編著『資本論を物象化論を視軸にして読む』と繋がる論攷で、『視軸』は共編著ですが、ここでの論攷は、一人での「物象化論を視軸にして」的な展開になっています。そしてまたこの著に納められている宇野経済学批判など、『資本論』に関する論考を第二次ノート作りとしてやる予定、これも後回しとしたいところですが、Ⅰの扱いと同じで、簡潔にまとめてメモりたいと思っています。「二 歴史的世界の存在構造」は第二主要論文とも言いえることしっかりメモります。「Ⅴ マルクスにおける哲学」はエンゲルスの有名な「哲学は死んだ、残るは形式論理学と弁証法だけである」という提言に対して、マルクス哲学を対置しています。このあたりは「廣松哲学」と言われ得ることを提示した廣松さんの意図を押さえ直す重要な作業です。

最後に「跋文—物象化理論の拡張」は、『存在と意味』の第二巻以降の実践論や文化論につながる論考で、この著が出たのは『存在と意味』第一巻が出された後で、第二巻の前、まさに廣松理論の広表ということを感じさせます。ちなみに高橋さんが解説で、「事的世界観 物象化論 唯物史観」の三つの絡み合っている理論ということを書いています。これは『著作集第二巻 弁証法の論理』の解説で、「リゾーム状」という概念で突き出していることにも繋がっています。廣松さんの名を冠した「廣松〇〇論」といわれるオリジナリティーもった理論は「事的世界観」「物象化論」「唯物史観」「共同主観性論」「四肢構造論」「弁証法の論理」などとあり、それは併列的にならべられることでもなく、関係性の総体としての網状の関係態なり、函数的連関態とか、函数内函数とか、錯分子構造とかいうところのとらえ返しも含めて、押さえ直す必要を感じています。若干この著を読みながら、少しはそのことを考えますが、むしろそのことは、一切の途はそのことに通じるの感があった、主著『存在と意味』の学習で、押さえる作業に入ります。勿論、未完の著で、その先どのような構想だったのかの推論も交えたとらえ返しになるのかも知れません。

なお、Ⅰ、Ⅱにはかなりの量の註が付いています。初期マルクス研究には貴重な資料になっていますが、これは初期マルクス研究の一連の書の学習、しかも、第二次学習ではなく、第三次学習の際に廻さざるをえません。そこまで、行けない公算が強いのですが。

さて、切り抜きに沿ったメモ取りに入ります。これからは斜体文字がわたしの文です。ここで、断っておきますが、この論攷は、マルクス・エンゲルスの物象化論を押さえた上で、廣松さん自身の「物象化論」の展開に入っています。従って、マルクス・エンゲルスの文の引用が多くなっています。これを逐一載せていくと本一冊丸写しになります。です

から、長文で引用したところは省いて、廣松さんのコメントを中心に切り抜きメモをとっています。で、だいたい意味がとれるのですが、取れないところは、この著自体に当たってもらうことをお願いするしかありません。わかりにくいところを更にわかりにくくしているとは思いますが、よろしくお願いします。

## 序 文

まず冒頭、この書の発刊の主旨を展開しています。「物象化論の構制」ということは、著者にとって、マルクスの後期思想を理解するうえでの重大な鍵鑰(「けんやく」のルビ)を成すものであり、また著者自身の構想する社会哲学・歴史哲学・文化哲学の方法論的基底を成すものでもある。この間の事情については、この十有余年、折々に表明しながらも、「物象化論の論理構制」そのものを主題的に論じることは永らく躊躇(「ちゅうちょ」のルビ)してきた。それというのも、一つには、『資本論』全三巻を包括するマルクスの「政治経済(学)批判」体系を物象化論の構制に則して貫通的に解釈する作業に若干の隘路(「あいろ」のルビ)を残していたためでもあるが、主要には、もう一つ、著者なりの実践哲学、わけでも役割行動の編制における権力的規制の論件において、必要にしてかつ十分な方法論的配備を見極(「みきわ」のルビ)め難かったためである。しかるに、ここ一兩年の間に、前者については、共著者に専門家の吉田憲夫氏を得て、旧著『資本論の哲学』の改訂・増補ひいては「マルクス政治経済(学)批判」体系の全体を視野に入れた解釈的再構成に目途が立つに至った。また、後者についても『存在と意味』第二巻「実践的世界の存在構造」の草案が漸次調(「ととの」のルビ)うにつれて、ほぼ成心(「せいしん」のルビ)が固まるに及んだ。茲に、「物象化論の構制と射程」を主題的内容とする本書を世に問い、識者の叱正を仰ぐ所以である。」 v P

各論文の構制について説明していく文があります。これについては、すでに蛇足的になっていることを畏れつつも復習的なコメントを書いているので、切り抜きメモをそのまま掲載します。対比して間違ったところがあれば指摘願えると有り難いと思っています。「第 I 論文「唯物史観の宣揚の為に」は、史的唯物論に関する俗流的な理解を卻(「しりぞ」のルビ)けつつ、唯物史観の世界観的視座とその構制を顕揚するものであるが、本書のコンテクストにおいては、特に“前期マルクス”におけるいわゆる「疎外論」と“後期マルクス”における「物象化論」との連続的不連続＝不連続的連続性を論考しつつ、マルクスの物象化論に関するイントロダクションの機能を演ずべきものとなっている。尚、この論稿の第三節「疎外論の止揚と物象化論」は新規に書き加えたものであり、この追補にともなって、先行の第一、第二節の本文および註(註は章末に一括)にも修訂の手を加えた。」 vi-vii P

「第 II 論文「物象化論の構制と射程」は、元来は第 I 論文における未完の“第三節”を独立の形で起稿し直したものであるという性格をもつが、成立の事情は措いて本書のコンテクストでいうかぎり、本書の基幹部をなすものである。」 vii P

「第 III 論文「歴史的世界の物象化論」は、今を去る十五年前、一九六八年の晩秋に執筆した学会特別講演の草稿(学会誌に事前)に掲載、構制は一九六九年の一月)であり、『資本論』における「商品世界」論の構制を「歴史的世界」全般の物象化的存立構造に推及する構案を述べたものである。この旧稿は、著者にとって、マルクス商品世界論の解釈を初めて発

表し、同時に亦、「役割論的構制」を初めて公言したのものとして記念すべきものであるが、論文集に収録することはこれまで自制してきた。その理由は、撤回したい論点が含まれていたからではなく、その後、この論文の第二節を敷衍(「ふえん」のルビ)展開するかたちで「言語的世界の存在構造」および「歴史的世界の協働的存在構造」を発表し(いずれも、拙著『世界の共同主観的存在構造』勁草書房刊に所収)、また、この論文における批判点を主題的に展開した「ハイデッガーと物象化的錯視」を公表し(拙著『事的世界観への前哨』勁草書房刊に再録)、さらにはこの論文の第一節を支える『資本論』読解を独立の一書『資本論の哲学』(現代評論社刊)として上梓するというように、この論文=学会講演における原型的発言を種々の方面にわたって主題的に展開しつつ、別の形で交換することにしたからである。……………この旧稿は、いかにもラフ・スケッチでありながら、いな、原型的なラフ・スケッチであるがゆえに、本書のコンテキストにおいては、稜線を際立たせるのに好便であるように思える。……………著者として最大の不満はマルクスの「価値形態論」への関説を一切割愛してしまっている点である。成程、「価値形態論」における人間関係は、“単純商品生産モデル”にしか十全には妥当しない。このことを慮(「おもんばか」のルビ)って価値形態論への関説を割愛したむきもある。とはいえ、この欠が議論を抽象的な域に押し止める一因になっていることは否めないし、経済学の専門家諸氏は「このような議論ではどうい『資本論』全三巻を物象化論の構制とやらで首尾一貫して解読することは覚束(「おぼつか」のルビ)ない」という印象を懐(「いだ」のルビ)かれることであろう。慥(「たし」のルビ)かに、本稿に限らず、本書の全体が『資本論』全三巻を通じる物象化論を顕揚するうえで、大きな落丁を残している。この落丁を埋めるためには、しかし、いわゆる「転形問題」その他、『資本論』に則した具象的な立論が必須であり、優に主題的な一書を必要とする。この故に、本書では敢て中途半端な関説を差控えた次第なのである。とりあえず、「価値形態論」と「物神性論」については、基幹の別著『資本論の哲学』(因みにこの旧著は増補改訂のうえ、明春、勁草書房により新版を上梓する予定でもある)によって本書の欠を補って頂ければ幸いである。」 vii-ix P

「第Ⅳ論文「自然界の歴史的物象化」は、これまた学会誌に執筆した旧稿の再録であり、……………この短論文集は、著者にとって、マルクス・エンゲルスの自然概念について主題的に論じた唯一の論稿でもあり、昨今では稀覯(「きこう」のルビ)の由、照会にあずかること再々であるので、敢て論点の重複も辞せず、“場違いの附録”として収録する途を選んだ、寛恕を乞いたいと念う。」 ix-x P

「第Ⅴ論文「マルクスにおける哲学」は、「寺子屋」主宰の講演会の記録で在り、物象化論を直接的な主題とするものではないが、第Ⅱ論文に謂う「体系的叙述=体系的批判」の構制、および、実践の場における「哲学の実現的止揚=止揚の実現」という論件に関わり、総じて亦、本書に盛ったモチーフを(或る特殊な視角からではあるが)総括する一面を有(「も」のルビ)っているので、これまた“附録”として収めた。前口上の一部と附記を省いた以外は、ほぼ忠実な再録である。」 x P

「跋文「物象化論の拡張は、マルクス・エンゲルスの物象化論を著者がどのような方向でどのような配備のもとに形象・展開止揚と庶幾(「しよき」のルビ)しているか、著者なりの意想と構案を、略述したものである。形式上は、「跋文(「あとがき」のルビ)」であるとは



いえ、この長文の新稿は第Ⅱ論文と並ぶ本署の中枢部とも目され得よう。」 x P

## I 唯物史観の宣揚のために

(この章の問題設定)「唯物史観ないし史的唯物論といえば、教科書のたぐいでは、屢々レーニンの言葉を踏んで、「弁証法的唯物論を社会・歴史の領域に適用し拡張したもの」とされている。そこでは、世界を「自然」界と「歴史」界という両つの半球に区分する近代哲学流の構図が立てられており、当の両半球に対応する「自然弁証法」ならびに「史的唯物論」という二大部門に対して「弁証法的唯物論」という“第一哲学”が先行するかのごとき構制がみられる。……。倅い、我が邦のマルクス研究者たちにおいては、戦前における三木清などの先蹤は措くとしても、戦後早くから田中吉六氏による弁証法的唯物論に対する唯物史観の時間的先行説が定着しており、「適用・拡張」ということを字句通りに受け取るむきは尠ない。だが、われわれとしては、体系の構制からしても、果たして唯物史観は弁証法的唯物論なる“第一哲学”を「適用・拡張」してものであるか、このことの間い返しを通路として、唯物史観の世界観的な構制を顕揚しなければならない。」 2-3P

(『ド・イデ』から引用)「われわれは唯一の学[Wissenschaft=体系知]、歴史(「ゲシヒテ」のルビ)の学しか知らない。歴史は二つの側面から考察され、自然の歴史と人間の歴史とに区別されうる。両側面は、しかし、切り離すことはできない。人間が生存するかぎり、自然の歴史と社会の歴史とは相互に制約しあう、自然の歴史、いわゆる自然科学には、われわれはここで関説しない。人間の歴史については、しかし、立ち入っておくべきであろう。というのも、イデオロギーというものは、元に還してみれば、その殆んどすべてが、人間の歴史を歪曲して把握したものか、人間の歴史を全く抽象化してものか、そのいずれかに帰着するからであって、云々。」 3P・・・歴史の物象化と抽象化

「ここにみられる「歴史」という概念の広表(「こうぼう」のルビ)に留目されたい。それは「自然の歴史」と「社会の歴史」とを「両つの側面(「ザイテ」のルビ)とする単一的・統一的な「歴史」である。しかも、そのさいに、「自然の歴史」というのは、宇宙進化史とか地球進化史とかいった次元での自然界の歴史ではなく、「自然の歴史(「ゲシヒテ」のルビ) = 「いわゆる自然科学」とされている。——マルクス・エンゲルスは、自然界と人間界(自然界と歴史界)とを両断する近代哲学流の存在了解をそもそも採っていないのである。」 3-4P

「唯物史観(唯物論的な「歴史」把握)というさいの「歴史」が、ここにみるように、格別な意味での「自然の歴史」と「社会の歴史」とを包括する「歴史」であるとすれば、そして、唯物史観(maerialistische Auffassung der Geschichte)が「われわれは唯一の学、歴史の学しか知らない」と言われるさいの単一的・統一的な「歴史の体系知」にほかならないとすれば、唯物史観は、断じて、自然界と並ぶ歴史界という半球に関わる通常の歴史観ではなく、総体的な世界観である、と言わねばなるまい。」 4P

「唯物史観はマルクス主義理論体系の単なる一部門ではないこと、それはマルクス主義的世界観の構制そのものであること、予備的留意事項としてこの旨を臆言しておく。」 4P

### 第一節 古典哲学の弁証法的止揚

(この節の問題設定)「ドイツ古典哲学の絶頂に位するヘーゲル哲学の内在的「止揚」を成就したもの、それがマルクス主義であるというわけである。／われわれ第三者の眼からみて

も、この自負には十全の謂われが認めらう。マルクス・エンゲルスは、近代哲学の棹尾を飾るヘーゲル哲学を止揚することにおいて、近代哲学の地平そのものを踰越している、茲に開かれた革らしい世界観的地平に照応するものが唯物史観にほかならない。」 5P

#### 【一】ヘーゲルの「主観—客観」図式の超克の試みとマルクス・エンゲルスの止揚

(この項の問題設定)「今日、人々が、近代(歴史的段階としての資本主義時代)の哲学的・世界観的地平の超克を論ずるにあたっては、いわゆる「主観—客観」図式の克服をメルクマールにするのが常套になっているが、われわれとしても、旧来通り、これを弁別的徴標にすることができる。／ドイツ古典哲学、わけてもヘーゲルの哲学は、或る意味では「主観—客観」図式に立脚した哲学の極北である。とはいえ、或る意味では、フィヒテやシェリングの哲学からして既にそうであるが、ヘーゲルの哲学は、よしんば「主—客」図式の埒内においてであるにせよ、「主観—客観」の二元的対立性の克服を志向するものであった。——マルクス・エンゲルスが「主体—客体」図式を克服しえたについては、ヘーゲルの前車の轍を見据えたことが大いに与(「あずか」のルビ)っている。」 6P

ヘーゲルのデビュー論文ともいふべき『フィヒテとシェリングとの哲学体系』からの引用があり、それについての著者のコメント「ヘーゲルは、このような諒解のうえに立って、主観と客観との対立性、ひいては、主観主義と客観主義、「独断的観念論」と「独断的实在論」の対立性を“克服”した地歩、絶対精神を実体＝主体とする「絶対的観念論」の立場を固めたのであった。——ヘーゲルの絶対的観念論は、第三者的にみれば所詮は観念論であるにしても、主観と客観との二元的対立性、“観念論と实在論との対立性”を“止揚”したものと自任されている。」 7P

この稿のまとめとしての、マルクス・エンゲルスのヘーゲル哲学の止揚「マルクス・エンゲルスは、少なくとも彼らの思想形成過程においては、主観性と客観性、精神と物質との二極的対立性のみならず、個別と普遍、実存と本質、形相と質料、有限と無限、自由と必然、等々の対立性、さらにはまた、観念論と实在論との対立性を克服しようとするヘーゲルのモチーフを継承した。そして、臆がて、ヘーゲルがそれを成就しえなかった所以のものを彼らは洞見しうるに至り、新しい視座に立ってその達成を図るに及んだのであった。マルクス・エンゲルスが、唯物史観と相即する革らしい世界観的地平を拓いたのは、ヘーゲルのモチーフの継承的展開の線上においてである。尤も、この過程はリニア[単線的]なものではなく多分に屈折しており、飛躍もみられる。／本稿は唯物史観の成立過程を手段的に追跡する者ではないが、唯物史観の視座と構制を対自化する一具として、ヘーゲル哲学が如何にして止揚されたかに留目しつつ、形成過程の幾つかの象面をも配視することにしよう。」 7-8P

#### 【二】マルクス・エンゲルスのヘーゲルと青年ヘーゲル派の止揚の試行

マルクス・エンゲルス『聖家族』からの引用を受けて「一八四四年秋というこの時点では、マルクスはフォイエルバッハを絶讃する準位にあり、ヘーゲル哲学をフォイエルバッハの線で揚棄しようとしていた。」 9P

「このさい留目したいのは、当時のマルクスが、フォイエルバッハを称揚しながらも、フォイエルバッハの謂う「唯物論」の立場を標榜することなく、敢てフォイエルバッハのうちに「唯心論と唯物論との対立の克服」を強引に読み込み、そのような立場を執ろうとし

ていることである。マルクスもエンゲルスも、ヘーゲル学徒として当初のうち観念論の立場を採っていたことは言うまでもないが、彼らはフョイエルバッハの唯物論によって強烈なインパクトを受けるに至っても直ちに唯物論の立場を受容することなく、一八四三年から一八四四年にかけて、飽くまで「観念論と唯物論との対立を止揚する見地」を模索したのであった。」 9-10P

『経哲手稿』からの引用を受けて、この稿のまとめ的文「マルクス・エンゲルスは、やがて、唯物論の立場を採るようになり、唯心論 対 唯物論、観念論 対 実在論の対立性の止揚ということを表しなくなるが、しかし、彼らはかつて自らその一面性を指弾した“唯物論”を選択したわけではない。唯物史観は唯物論的な史観には違いないにせよ、ここでの唯物論は単純素朴な“唯物論”ではなく、観念論 対 実在論、唯心論 対 唯物論の止揚的統一を志向していたかつてのモチーフを含意したものであり、そこでは、主観性と客観性、精神と自然、……の真の統一というかつてのモチーフ(この意想そのものはドイツ・ロマンティークこのかたのものと言うこともできる)が維持されている。」 10-1P

### 【三】「絶対精神の真実態」とされる「人間」に定位したマルクス・エンゲルスの一八四四年時点の構案

(この項の問題設定)『経哲手稿』や『聖家族』の時点におけるマルクスは、フョイエルバッハを亀鑑としつつヘーゲル哲学の内在的止揚を図ろうとしていたとはいえ、フョイエルバッハ哲学の枠内に踰躑(「きよくせき」のルビ)していたわけではなく、固有の思想を見せている。そこには後年の萌芽も多々みられる。が、当座の論件として止目したいのは、ヘーゲルにおける「絶対精神」を「人間」というその「真実態」で対置し、以て、自然と精神との如実の統一を措定しようとする構案である。」 11P

「当時のマルクスは、実体＝主体の自己疎外と自己獲得というヘーゲルの構図そのものは「発見された」「歴史的運動の表現」であるとして積極的に評価する。しかし、ヘーゲルが当の「実体＝主体」を「絶対精神」としているところに致命的な難をみる。」 11-2P

「ヘーゲルにあっては「主語と述語とが接待的に顛倒した関係」に陥ってしまっている。／当時のマルクスによれば、ヘーゲルの謂う「絶対精神」とは形而上学的に改作された「人間」にほかならず、ヘーゲルの謂う絶対精神の自己疎外と自己獲得とは人間の「労働」における自己疎外と自己獲得の過程、その「歴史的過程」が形而上学的に改作され、思弁的に鏡映されたものにほかならない。」 12P

『経哲手稿』におけるマルクスは“労働の存在論”ともいうべきものを展開しているだけでなく、既に一定の経済学的な具象性をもった議論をおこなっているし、後論との関係で引いておけば、次のように立論してもいる。「産業は、自然の人間に対する現実的な歴史関係である。……産業が人間の本質諸力の露呈として把えられるとき、自然の人間の本質ないし人間の自然的本質も理解される。……産業を通じて生成する自然が人間学的自然である。云々。」 13P

この筋のまとめ的文「こうして、一八四四年時点のマルクスにおいては、自然と精神、客観性と主観性……の対立をヘーゲル流の形而上学的な絶対精神ではなく、「人間」という実体＝主体に定位して、しかも、人間労働という現実的な歴史過程に定位して“止揚統一”する構案が立てられた。／だが、このような構制によって果たして「主観—客観(主体—客

体) 図式が克服された所以になるであろうか? なるほど、主—客の対立性の統一性は図られている。がしかし、ヘーゲル流のいわゆる“主体—客体の弁証法”の構図、実体=主体の客体化と再主体化の構図が維持されているかぎり、それは依然「主—客」図式の埒内にあるのではないか? 然りと云わざるをえない。／現にマルクスは、翌年にいち早く、この四四年時点における一時的な構案を自己止揚する。人間労働の歴史的過程に視座を据える着眼をはじめ彼は諸多の論点を保持しつつも、ヘーゲル学派流の実体=主体の自己疎外と自己獲得という構制、ひいては「主観—客観」図式そのものを彼は超克するに及ぶ。そのことに俟って、マルクスは近代哲学一般の地平を踰越し、革らしい世界観の地平を拓く、それが「唯物史観」の拠って立つ地平にもほかならない。」 15P・・・唯物史観の宣揚

## 第二節 人間主義の超克と新地平

(この節の問題設定)「マルクスが四四年時点の一時的構案を止揚して新地平を拓くに当っては、内発的な熟成と併せて或る外的な衝撃も与っている。外的な機縁というのは、折しも激烈になったヘーゲル左派内部の“内ゲバ”的論争、わけでも、マックス・シュティルナーが『唯一者とその所有』で打ち出したヘーゲル左派総体に対する衝撃的な内部批判である。／爰では、ヘーゲル左派内部の論争を跡づけたり、シュティルナー・ショックを詳しく分析したりする作業は課題外であるが、“論争”の一斑をも配視しつつ、マルクス・エンゲルスが論争の渦中をくぐりぬけることを介して、いかにヘーゲル左派の準位、なかんずく「人間」主義の準位を超克し、そのことによっていかなる新境地を拓くに至ったか、その次第に眼を向けることにしよう。」 15P

「今日われわれの眼からみれば、彼らが当時すでにフォイエルバッハの埒を越えていることを認めうるにせよ、当時の彼らがフォイエルバッハ式の「人間(類的存在としての人間)」主義の大枠内に位置すると目されるかぎり、垂流扱いをされたのも謂われなしとしない。……だが、彼らの思想的成長は、もはや「人間」主義への安住を許さなかった。かれらはフォイエルバッハ的な「人間」主義への共賛を自己批判的に乗り越えることを要した。とはいえ、それは論難者たちへの単純な屈服ではない。彼らは「人間」主義を超克すると同時に論難者たちの準位をも超克し、総じて、ヘーゲル左派イデオロギーの拠って立つパラダイムをトータルに超脱しつつ、新しい地平に立ったのである。」 16P

### 【一】シュティルナー

「シュティルナーは、実存的唯一者(そのようなものとしての「自我」)を本質的類人間(「人間なるもの」)に対置する。——『唯一者とその所有』は二部構成になっており、第一部が「人間」論、第二部が「自我」論と題されているのであるが、第一部はフォイエルバッハはその垂流の「人間」主義に対する批判へと議論が集約される。——シュティルナーは、キリスト教的な「神」、ヘーゲル式に言えば「絶対精神」が、ヘーゲル左派の展開過程において、その真実態は「人間」である(シュトラウス)、その真実態は「人類の自己意識」である(B・バウアー)、その真実態は「人間なるもの」である(フォイエルバッハ)、というように“「神」とはそのじつ「人間」である”として把え返された先蹤を念頭に置いている。」 17-8P

「茲で、シュティルナーは次のように指弾する。フォイエルバッハの徒は、人間こそ至高の存在であると宣言し、人間を原理に据えると唱しているが、その「人間」は実存的な現

実的人間ではなく本質存在としての「人間なるもの」であり、「神＝人間」といみじくも明言されている通り、「人間」とは「神」の別名にすぎない。「神としての神」への拝跪は卻けられるに至ったにせよ、実存的諸個人たる生身の人間は依然として「人間なるもの」(＝“神の真実態”!)に拝跪する構制になっている。今や、「人間なるもの」を至高の存在とみなし、類的本質としての「人間」を実体＝主体とするフォイエルバッハ流の構制そのものを止揚しなければならない。／シュティルナーに言わせれば、「人間なるもの」は「神」と同様、「理念(「イデー」のルビ)(観念)」たるにすぎない。そのようなものは実在しない。実在するのは実存的な諸個我のみである。」 18-9P

「シュティルナーは、昨今では、ケルケゴールと並べて「実存主義」の開祖に数えられるが、彼は抽象的に実存主義を唱えたのでも、また、宗教哲学の領域内で議論を展開したのでもなかった。……爰に「世界史を以て『人間なるもの』の歴史」だとみなす構制の歴史観を厳しく批判しつつ、彼固有の歴史観を対置する。／ここでは、しかし、シュティルナーの歴史観にまで立入るには及ぶまい。彼はアダム・スミスの独断なども試みた人物だが、この時点における彼の歴史理論は社会科学的な具象性には欠ける。——われわれとしては、フォイエルバッハとその“亜流”の「人間」主義に対する彼の強烈な批判を機縁にして、マルクス・エンゲルスがどのような新境地を拓いたか、その顛末を見届ければ足るであろう。」 19P

## 【二】シュティルナーに対するマルクス・エンゲルスの対応

(エンゲルスのマルクス宛の書簡)「シュティルナーは、フォイエルバッハの『人間』、少なくともキリスト教の本質における『人間』を卻ける点では正しい。……『人間』は、経験的な人間に基盤をもたないかぎり、幽霊だ。ようするに、僕らの思想、わけても、僕らのいう“人間”を新なるものとして主張しようとするかぎり、僕らは経験論・唯物論から出発しなければならない。僕らは普遍を個から導出しなければならないのであって、それ自身から、乃至は、ヘーゲル流に宙空(「ルフト」のルビ)から導出してはならない」 20P

「シュティルナーに対するマルクスの批判・反批判が主題的に成分化されるのは、一年以上もあとに執筆された『ドイツ・イデオロギー』の第三章「聖マックス」においてである。が、「人間」主義に対するシュティルナーの批判を受け留めて、この一年有余のあいだに、マルクスは多分に屈折した心理・思想的過程を経たものと忖度(「そんたく」のルビ)される。」 20P

「シュティルナーは、実存と本質とを峻別し、本質存在としての「人間なるもの」は自存する実在ではなく、たかだか「理念(観念)」にすぎないと言う。」 21P

「フォイエルバッハやマルクスが、類的存在・類的本質としての「人間」を云々するさいに、個的存在・固定実存としての人間と密接に関連させて把握していたことは、彼らが「感性的・具体的」な現実定位しようとしていた以上、当然といえば当然である。この当然事は措くとしても、実存と本質との統一的把握ということはヘーゲル哲学において既に大きな課題であった。……シュティルナーがマルクスを名指して批判した命題「私は一つの現実的な類的存在に[“人間解放”によって]ならなければならない」というテーゼも、実存と本質との自覚的統一というモチーフから発したもののなのである。」 21P

「フォイエルバッハは人間が「神」(人間の本質の疎外態)を自己の内に取り戻した場合、疎

外から自己回復した在り方の場面で“実存と本質とが合一する”という構図を立てる。マルクスは、単なる宗教的疎外の解消という域を超えて、『ヘーゲル国法論批判』の四三年時点では一種独特の「民主制」国家に、『ユダヤ人問題』では「人間解放」に、『経哲手稿』では「共産主義」社会に、人間の疎外からの自己回復、そこにおける実存と本質との即且対自的な合致を託したのであった。フォイエルバッハにおいてもマルクスにおいても、実存と本質との真の合一ということは人間存在の常態ではなく、即且対自態において実現することとされていた。」 22P

「それでは、即且対自態を実現する以前の局面、疎外状態にある局面では、一方の実存と他方の本質とがバラバラに分離・並存しているのか？ 勿論、否である。ヘーゲル学派の存在了解によれば、実存的個別者と本質的普遍者とは決して各々が独立自存するものではない。実存的個別者は必ず本質的普遍者を“宿す”という在り方で、本質的普遍者は必ず実存的個別者に“宿る”という在り方で、その都度つねに個別と普遍とを統合した在り方で現存在する。このさい“宿す”ものと“宿る”ものが二分化的区別性の相にあるかぎりでは両者は如実に合一しているわけではないが(上述の通り、如実の合一は即且対自態に限られる)、しかし、実存的個別と本質的普遍とはそれなりの仕方で恒に統合されてはいるのである。」 22-3P

「絶対的精神の自己疎外と自己回復の総過程とか、人間の自己疎外と自己回復の歴史的総過程とか、実体＝主体の弁証法的大循環の構制に止目するとき、そこで一貫した実体＝主体としての自己同一性を担うのは、どうしても個別体としての実存的個別者の契機ではなく、普遍体としての本質的普遍者の契機である、と言わざるをえぬ市場に直面する。／シュティルナーが衝くのはまさにこの大循環の構制に即してである。」 23P

「およそ人類史としての歴史が論件となるとき、個々人という次元での歴史的営為の主体と「人間」という次元での歴史主体との二義性がいつも問題になり、両者の関係づけが課題になる。／爰で、人がもし、「人間」などという主体は単なる論理的仮構であって、歴史の主体は実存的諸個人だけであるという唯名論的な見地を採るとすれば、それはそれで一つの立場であろう。……現に、シュティルナーはこの見地に立って「人間」を卻ける。」 24P

「だが、少なくとも『経哲手稿』時点までのマルクスは、彼がまだヘーゲル左派の大枠内にあった以上は、当然といえば当然であるが、個々人には解消できない次元での「人間」を立てる構制を採っていた。それも消極的な残渣というわけではない。当時のマルクスは、前節で見ておいたように、ヘーゲルが大循環の「実体＝主体」とする「絶対精神」をその“真実態”たる「人間」で“置換”し、「人間」の自己疎外と自己回復の大循環過程として人類史を把握(「ベグライフェン」のルビ)しようという雄大な構想を積極的に懐いていた。そのかぎり、歴史的主体として、個の実存とは区別される類的本質存在としての「人間」が、論理構制上、積極的に措定されていたことになる。シュティルナーは、無論、未発表の『経哲手稿』を知るべくもなかった。(彼がもしこの手稿を繙読してそこに盛られている構想を知ったならば、雀躍して絶好の標的にしたことであろう!)が、彼は『独仏年誌』に既発表のマルクスの論文のうちに今問題の構制を読み取って批判の刃を向けたのであった。」 24-5P

「シュティルナーが批判するのは、まさしくこのような構制において一貫した「実体＝主体」として措定される「歴史の主体」としての「人間」なるものである。彼は、この構制では“ルードヴィヒは死すとも王は死せず”と同じ仕掛になっていると嘲笑する。彼シュティルナーは、重複を厭わずに引用すれば、「“人間なるものは死せず！”というわけだ。……」……………」 26P

「彼(マルクス)が『経哲手稿』の時点で採っていたヘーゲル学派の論理構制を対自化してみると、シュティルナーによる批判が遺憾ながら突き刺さってくるのが判る。」 26P

「ここに、マルクスは、フョイエルバッハ的な「人間」主義に共賛していた自己の思想的準位に反省を加え、「人間の歴史」ということ、わけでも「歴史の主体」ということを抜本的に再検討し、新しい視座と構制にもとづいて理論の再構築を遂行する運びとなった。——われわれはその達成を翌る一八四五年を転機とする一連の文典によって確認することができる。」 26-7P

### 〔三〕 マルクス・エンゲルスの拓いた新地平

(この項の問題設定)「マルクスは、シュティルナーによる「人間」主義への批判に接する直前の時点で、ブルーノ・バウアー一派との論戦を契機にして、みずから内発的に、実体＝主体の自己外化と自己獲得というヘーゲル学派式大循環の論理構制の孕む難点を半ば自覚するようになっていた。このことは、ヘーゲル学派の「思弁的構成の秘密」を告発した『聖家族』の有名な章句を分析してみれば容易に認められる。が、疎外論の論理構制に関わるこの件は次節に譲ることにして、ここでは「人間」の問題、本質と実存の問題に即しつつ、マルクス・エンゲルスの拓いた新地平を觀望しておこう。」 27P

#### 1 マルクスのフョイエルバッハとシュティルナー批判——実体主義そのものの批判

マルクスの『フョイエルバッハに関するテーゼ』六などの引用の後に「マルクスの『テーゼ』がシュティルナーの触発とどうどう関わるかは審らかでない。が、ヘスがフョイエルバッハにおける“人間”の二義性を指弾したのがシュティルナーの触発を介してであることはまず確かである。」 28-9P

「シュティルナーに言わせれば、実在するのは実存的個体のみであって、本質的存在としての「人間」なるものは実在しない。両者を、混淆したり、二重写しにしたりしてはならない。しかるに、フョイエルバッハの徒は、類的存在としての人間ということで、実存的個体と本質的普遍とを二重写しにしている！」 29P

「マルクスとしては、シュティルナーの指摘に一半の妥当性を認めつつも、総じては彼シュティルナーの拠って立つ存在観のパラダイムそのものを却けて、新地平を拓く。」 29-30P

「惟えば、ヨーロッパにおける存在観の歴史においては、二種類の「実体」が考えられてきた。実存個別者たる第一実体、および、本質的普遍者たる第二実体、がそれである。「人間なるもの」とか「果物なるもの」とかというような本質的普遍者(第二実体)が個物とは別途に実在するという考え方(つまり、「普遍論争」における「実念論」の立場)は、近代においてこそ不評であり、妄言とみなされかねないが、中世においてはこれが主流派であったことを想起されたい。——ヘーゲル学派は、上述の通り、第二実体が独立自存するとは考えないが、しかし、第二実体は第一実体に“宿る”という仕方で両実体を“統合”的に扱った。／ところで、第二実体が第一実体に“宿る”、視角を変えて言い換えれば、第一実体が

第二実体を“宿す”という了解は、シュティルナーに指摘されるまでもなく、成程問題である。」30P

「マルクスは、第二実体という在り方での人間的本質を卸けるだけでなく、個々人が第一実体という在り方で自存するというシュティルナー的存在観をも同時に卸けるのである。マルクスの考えでは、“宿る—宿す”という想念は慥かに誤りではあるが、そこには或る真実態が歪んだ形で投影されている。」31P

「シュティルナーの実存観からすれば、第一実体としての実存的個体は、一切の述語的本質規定から超絶して、それ自体でかけがえのない個体としての自己同一性をもっていることになる。しかしながら、マルクスに言わせれば、何々という“述語的”規定性をことごとく剥奪されても自存すると称される実存的第一実体なるものは実在せず、一切の本質的規定性をもたぬ実存なるものはそれこそ空疎な抽象体であり「無」なるにすぎない。(尤もシュティルナーは、サルトルに先駆けて、「無」と自己規定しそれに居直っているのであるが)。いわゆる“本質的”規定性をはなれて実存的第一実体が自存するわけではない。」31P

「ヘーゲルはあの「実体＝主体」論にかぎらず、実体主義的な存在観を慥かに払拭しきれとはいえない。が、しかし、彼は具体的な場面では関係主義的な知見を示しており、“関係態こそが第一次的存在であって、諸関係の結節を自存化したものがいわゆる第一実体、諸関係規定の総体を自存化したものがいわゆる第二実体、にほからない”という観方の間近かにまで達していた。」32P

『ドイツ・イデオロギー』での主題的なシュティルナー批判を先取していえば、シュティルナーはフォイエルバッハの“人間”が孕んでいた二重的規定、すなわち、本質と実存という両契機のうち、後者の契機だけを真実在として自存化しているのにすぎないのであって、彼シュティルナーの謂う「唯一者」「実存的個人」は「抽象的で孤立化せる[つまり一切の社会的関係を捨象された]人間的個人」たるにほかならない。シュティルナーは「彼の分析する抽象的個人が一定の社会的形態に属することをみない。」という次第で、フォイエルバッハの二重的規定に対する批判のうちに、論理的には、シュティルナーに対する批判も既に含意されている。」33P

「本質が実存に“宿る”という範式は妥当しないにせよ、そこには諸関係の総体と諸関係の結節との統合性という事態が、屈折したかたちで、とにもかくにも投影されていた。そこには、普遍者は個別者を離れて自存しないという了解と同時に、本質(正しくは諸関係規定の—総体)を離れて実存が独立自存するわけではないという正当な了解が屈折して秘められていた。今や、諸関係の実態に即しつつ、実体主義そのものを超克することが要件である。——類的本質に定位したフォイエルバッハ流の「人間」主義だけでなく、個の実存に定位するシュティルナー流の人間主義をも併せて、“人間”を実体＝主体とする「人間主義」一般が超克されねばならないのである。」33-4P

## 2 マルクス・エンゲルスの「歴史」の場に即しての積極的提題

「マルクス・エンゲルスは「人間主義」の超克を抽象的・一般的な存在論の次元で遂行したのではなく、まさしく「歴史」に定位しつつ具体性を以って遂行した。——われわれとしても、今や、「歴史」の場に即して、彼らの積極的な提題を見ることにしよう。」34P

「シュティルナーへの反批判をも主題の一契機とし、ヘーゲル左派イデオロギー—総体の批



判的超克を宣する『ドイツ・イデオロギー』において、マルクス・エンゲルスは、歴史的諸関係に“内存在”している人々、「人々の対自然ならびに相互的諸関係」に視軸を据えて議論を再構築している。——『テーゼ』においては「社会的諸関係の総体」という一般的な言い方にとどめられていたが、今や、謂うところの諸関係が「生産諸関係」を基軸にして構造的に規定し返される。／人間諸個人が「何であるか(Was=本質)ということは、彼らの生産に帰一する。すなわち、彼らが何を如何に生産するかということに帰一するのである」。というのも、「諸個人が如何なる仕方で自分の生(Leben)を発現するか、その仕方に応じて彼らの存在がきまる。」わけであるが、「諸個人が自分の生を発現する一定の方式」、それが「生産の様式」にほかならない所以である。」 34-5P

『ドイツ・イデオロギー』からの引用文を受けて、「読者のうちには、唯物史観の視座と出発点を表明した右の一文に、昨今流行のエコロジーの構えと相通ずるものを看取されるむきさえあることであろう。ヘッケルが「生態学(「エコロジー」のルビ)」という詞を新造し、「動物の、有機的環境ならびに無機的環境に対する関係の学」と定義したのは、これより二十余年も以後のことであるが、マルクス・エンゲルスがいちはやく“人間生態学”的な視角で「歴史」を把握していたことは銘記されてよい。」 35-6P

「生態学が、当事主体と環境条件とを統一的な「系(「システム」のルビ)」として把握するさい、それは決して単に生物にとっての環境を顧慮するという点に主眼があるのではない。かのサクセッションの理論などにおいて顕揚されるように当事生体群の営為が環境条件を改造していくこと、そしてこの改造的変様が生体群の在り方を逆規定すること、この相互規定的なダイナミックな関連に主眼がある。マルクス・エンゲルスは、まさにこの点を押さえることにおいて、所謂「地理的決定論」や「風土史観」のたぐいの(俗流的な“唯物論的史観！)と相岐れ、対象的活動としての「実践」の立場を生態学的な場面において定礎する。」 36-7P

「マルクス・エンゲルスが「歴史」を觀ずるにあたり、人間主体と自然的環境との生態学的な相互規定態を表象していたこと、このことまでは確かであり、これは銘記に値する。」

37P

「われわれは、マルクス・エンゲルスが、世界に“内・存在”する“人間”の在り方をさしあたり生態学的な「対自然ならびに諸個人相互間の関係」の次元で押さえていること、そして、「生産関係」という唯物史観の基幹的カテゴリーもこの基礎場面に定位されていること、このことを対自化しうれば足る。」 37P

「「生産」ということは、「人間(「ヒト」のルビ) —自然」の生態学的な動態的関連(『資本論』での表現を茲に藉りていえば「人間と自然との物質代謝(「シュトッフ・ヴェクセル」のルビ))の機軸であって、物質的生産の場という結節環における人間生態系的な編制関係、それが「生産関係」にほかならないのである。」 37-8P

「かつてのマルクスは、「精神と自然との統一」=人間、という範式で觀じ、かの二元的な対立性の統一を「人間」に求める構図を採っていたが、『ドイツ・イデオロギー』とそれ以降では、「人間と自然との統一性」の過程的現場を「産業」に看る。今や、主観性と客観性……等々の二元的対立性を実践的に止揚・統一する場が「産業」に定置される。」 38P

### 3 「産業」に規定される用能的・生態学的自然

「人が、もし、産業の場における人間と自然との統一というさいの「自然」を、単なる物理的自然、ハイデッガー式にいえば、「物在」(Vorhandensein)としての自然物の相で受け取るならば、その場合には成程、地球表面の片々たる一部分しかカバーしないことになろう。だが自然は、第一次的にはハイデッガーの謂う「用在」(Zuhandensein)の相で現前する。例えば、太陽は、物理・化学的客体という以前に、四界を明るく照らし、草木を育くみ、身体を暖ためる……ものとして、月は夜道を照らす……ものとして、というように、第一次的自然は生の実践的関心に応ずる相で現前する。／マルクス・エンゲルスは、「物在」とか「用在」とかいう詞は勿論もちいていない。だが、彼らは、フォイエルバッハが「自然」を「科学流の観方」での自然、「物理学者や化学者の眼にしか開示されない」相での自然に即して——まさに「物在」の相で！——立てていることを厳しく批判している。」39P

「唯物史観の視座を確立したマルクス・エンゲルスは、このように、「自然」なるものをまずは「用在」の相で、剴切にいえば、人間生態系(これは動植物の生態系一般とは種差的に大いに異なっており、生産活動という積極的な要因によって編制構造が規定され、産業を編制機軸にしている)の内在的契機をなしている相で、従って、人間の営為によって「変様され」「歴史化された自然」の相で、観取しているのである。／人間と自然との産業の場における統一という言い方をすると、さながら、人間というものと自然というものとがまずあって、事後的に両者が結合されるのであるかのように響くが、生態系的な関係の第一次性こそが真諦である。自然は産業の場で歴史的・現実的・実践的に自然と媒介されてはじめて現に在る人間として存在しているのが実態である。」40P

「個々人なるものが自存して関係態に入り込むのではなく、個々人の定在(「ダー・ザイン」のルビ)も相在(「ゾー・ザイン」のルビ)も当の歴史的諸関係によって規定されているのであり、剴切には、定在・相在する個々人は当の諸関係の“結節”にはほかならない。(関係の結節というと、人々はとかく、関係なるものを本質化して表象し、“結節”が個性なき均質粒子であるかのように思い做してしまう。だが、関係の結節は一つ一つユニークであり、まさに個性的である。人々が実存的な実体的個体に内属する個性として思念しているところのものは、決して個体それ自体に内在するものではなく、まさに関係的“結節”のユニークネスが実体的属性として“物性化”的に錯視されたものにすぎない。)」41P

『ドイツ・イデオロギー』からの引用を受けて「マルクス・エンゲルスは、「精神」「意識」を、内なる実体とか機能とかと観ずるのではなく、本源的に「関係」として了解している。しかも、人々の“対自然的かつ相互的な”対自化された関係として、剩え、今日風にいえば、「言語的交通を以ってその現実態」とするとき「間主観性」においてのみ現成するものとして了解している。／唯物史観においては、人間はいわゆる精神的・意識的な契機をも含めて「歴史的世界」に内・存在する関係態として了解されているのである。／こうして、今や、本質としての人間のみならず、実存としての人間も、対自然的かつ相互的な生態系的・第一次的關係性に即して規定し返される。独自の歴史存在論とも相即するこの新しい人間存在論の地平において、「本質」主義的であれ「実存」主義的であれ、「人間」を実体的主体とする「人間主義」一般が端的に止揚され、革らしい世界観が展かれるに至った。」42-3P

この節のまとめ的文です。「人間主義の超克にもとづくこの新しい世界観は、存在論的に

抽象化していえば、実体の第一次性というヨーロッパ伝統の存在観に代えて“関係の第一次性”という存在了解を押し出したものと für uns に規定されうるにせよ、まずは「人間」存在をめぐる省察を介して「歴史」の場に定位されている。それは、われわれが本節を通じてみてきたように、生産の場を機軸にして編制されている生態学的な「対自然的・間(かん)のルビ)人間的」関係態、この「歴史的世界」への内・存在に定位して人間存在を規定する。」43P

「マルクスは、われわれの見てきた通り、“実存主義の元祖”の一人たるシュティルナー批判を機縁にして、フォイエルバッハ流の「本質としての人間」主義と同時に、「実存主義」(「実存としての人間」主義)をもいちやく超克するに至っていた次第なのである！——／省みるに、マルクス・エンゲルスはハイデッガーとは課題意識や問題関心を異にしており、マルクス・エンゲルスのそれはハイデッガーの「世界」「内存在」「交渉連関」とは位相と次元を異にし、はるかに具体的で且つアクチュアルではあるが、唯物史観の世界観的新地平が“歴史・内・存在”ともいうべき構え(Grundverfassung)に定位して展らかれているということ、このことまでは揚言することができよう。」44P

### 第三節 疎外論の止揚と物象化論

前節からのつなぎとして「われわれは前節において、マルクス・エンゲルスの人間の「本質」と「実存」をめぐる問題を介して「人間主義」を超克しつつ新しい境地を拓いたこと。——それは、存在論一般の次元で抽象化していえば、ヨーロッパに伝統的な「実体主義」的存在観から「関係主義」的存在観への転換への転換に通ずること——さしあたりこのことの一部を瞥見した」45P

(この節の問題設定)「今や一歩進めて、マルクス・エンゲルスが、「実体＝主体」の自己外化と自己獲得という「疎外論」の構制を自己批判的に止揚する旋回と相即的に、近代哲学流の「主—客」図式の拠って立つ地平そのものを決定的に超克しつつ、社会・歴史理論の新しいパラダイムを提出するに至った経緯、このことを「物象化論」の定位を兼ねて追認しておく段取りである。」45P

#### 【一】疎外・回復という図式の止揚

『聖家族』からの引用を押さえて、「マルクスは、このように一八四四年の晩秋頃には、本質的普遍者それ自体を自己運動の「実体＝主体」とする構制の難点に気がついていた。」47P

『ドイツ・イデオロギー』のマルクス・エンゲルスは、今や端的に、人類史を自己疎外と自己回復の過程として把える観方そのものを卸けるだけでなく、この構制のイデオロギッシュな錯認の由って来たところをも批判的に剔抉(「てっけつ」のルビ)してみせる。」49P

「論者たちが、(a)という歴史的状态から(b)という歴史状態への変化を“社会科学的”に説明できるようになり、また、(b)から(c)への変化を“社会科学的な法則性”に即して説述できるようになると、——なるほど、そこでも、依然、(a)→(b)→(c)を疎外と回復という範式で“哲学者たちに判り易いように”標記することは一応可能だとしても、そこでは、もはや、自己疎外に困って(a)から(b)に成るとか、自己回復に困って(b)から(c)に成るとかいうような、“起動的な説明原理”としての意義が「疎外」「回復」という概念装置から失われる

に至っており——。疎外・回復という概念装置は、もはや“起動的な説明原理”としては無用になる。ここでは、(a)から(b)への歴史的変化、および、(b)から(c)への歴史的変化が、諸個人の具体的な歴史的営為の“合成力”に即して説明されるのであり、疎外とか回復ということが“起動的な説明概念”としては効(「はたら」のルビ)かない以上、説明原理はあくまで、諸個人の具体的な営為の“合成”に即して物象化される“社会科学的な法則性”に置かれる所以であって、よしんば(a)→(b)→(c)という歴史的変遷に疎外・回復の範式的構図を当て嵌めたとしても、ここでは、もはや疎外論が元来もっていた意義と機能が失われるに至っている次第である。」 54P

「現状を“疎外態”(b)なりとして規定したところで、それは(a)の高次的回復としての“本来態”(c)の必然性を説く装置としては、元来、妥当性を欠くものにすぎなかったことが対自化される。／マルクスは、一八四五～四六年の時点に、まさしくこのことを対自化するに至ったのであり、そのことが「物象化論」の確立とも交錯している次第なのである。」 55P

#### 【二】“小循環”過程の構制としての意義の吟味—物象化理論の構成

(この項の問題設定)「われわれは前項において、疎外論が人類史的な大循環の内在的説明原理としては妥当しえない所以を論定したのであったが、疎外論が個別的な社会的営為における“小循環”過程の構制として妥当性を有(「も」のルビ)たないかどうかには事実上ふれるところがなかった。本項では、この宿題の解消をも図りつつ、物象化論の構制にも漸次ふれて行こう。」 55-6P

「唯物史観は、人類史なるものを抽象的に一括して観ずるのではなく、具象的な分節的編制に即して把握する。そこで、「社会的構成体」とか「生産関係」とか「単位的経済体」(ein ökonomisches Ganze)とかが措定され、このような編成態の共時的・通時的な構造や動態が“社会科学的”に論究される運びとなる。」 56P

「ところで、いわゆる社会的現象を研究対象とする学知は、当の対象の存在性をめぐる、二極的な立場の分裂に悩まされがちである。それは、社会存在論的にいえば、社会唯名論(「ノミナリズム」のルビ)と社会実在論(「レアリズム」のルビ)との対立である。前者の立場では、実在するのは諸個人とその行動だけであって、社会という固有の実在が存在するわけではないとされ、後者の立場では、社会というものは諸個人とその行為の代数和には還元できない固有の存在性をもち、個々人はむしろ独立自存しえない分枝的存在にすぎないとされる。(前者が典型的に現われているのが近代の社会契約論であり、後者の典型が古代以来の社会有機体論である。が、両者は位相と次元を変えて、いわゆる方法論的個人主義といわゆる方法論的社会主義との対立となって今日にまで及んでいる)。マルクス・エンゲルスは、社会有機体説が復活していた思想史的局面のさなかで思想形成を遂げたこともあって、社会存在論をめぐるこの対立に関して、しかるべくして態度決定を迫られたのであった。」 56-7P

「マルクス・エンゲルスが、ヘーゲル学徒として、社会実在論の見地から出発したことは言うまでもない。がしかし、彼らはいわゆるヘーゲル式の社会有機体観からは割合いと早く脱却した。それでは、彼らは社会唯名論の立場に移行したのか？ 否である。後年の『経済学批判』序説からも知られるように、マルクスは「人間は文字通りの意味で社会的動物である。……社会のなかでだけ自己を個別化できる動物である」という了解の構えを崩し

ていない。では、社会という固有の実体的存在が第一次的に実在するのか？ 勿論、否である。彼マルクスに言わせれば、「社会は諸個人から成り立っているわけではない」が、「社会は諸個人の諸関連・諸関係の一総和」なのである。——我々は前節において“人間”（**本書、欠落・誤植箇所。文庫版で確認**）、つまり、社会唯名論者が実体視する諸個人が、「その本質においては社会的関係性の総体」として、関係の第一次性という存在了解のもとに把え返されたことを見ておいたが、右の引用が端的に示しているように、マルクスにおいては、社会実在論者が実体視する社会なるものの側もまた「諸関連・諸関係の一総和」として、関係の第一次性に即して把え返される。」 56-7P

「唯物史観においては、こうして、一方の社会唯名論（「個人」主義）が自存的実体とみなす「個人」も、他方の社会実在論（「社会」主義）が自存的実体とみなす「社会」も、俱（「とも」のルビ）に、自存的な実体ではなくして、両つの次元における「諸関係の一総体」であると把え返し、この存在観にもとづいて、社会唯名論と社会実在論との二極的対立性を止揚する。／このさい、しかし、「諸関係」なるものが独立自存するわけでは無論ありえない。それは分肢的な諸個人を“項”とする諸関係なのであり、実在するのは諸個人を“項”とする関係態である。但し、当の諸関係は、当事諸個人の意識には彼ら自身の相互的諸関係としては意識されないのが普通であり、日常的意識においては、それはむしろ諸個人から独立自存する客体的な対象の相で、ないしは対象的属性や対象物どうしの関係の相で映現する。けだし、「社会」なるものの一全体が固有の実体であるかのように錯視されうる所以でもあるが、ここに、諸々の社会的形象（「ゲビルデ」のルビ）が对象的に自存視されることになる。しかも、これらの社会的形象は、外在性の相で認識されるという域を超えて、諸個人の営為に対して拘束性をもつ相で、諸個人の行動を実践的に規制しさえもする。」

57-8P・・・「社会モデル」の押さえに使えるところ

「唯物史観の視座では、諸関係が当事主体の日常性にとって物象的に“自立化”するという一方の事実、および、この物象化された形象が、学制的反省によって把えられる真実態においては、あくまで関係態であるという他方の事実、これら両面を把握することが要件である。——前者は「学理的見地からみれば錯認にすぎない」といっただけで済ませるわけにはいかない。というのも、当事主体たちは当の物象化的錯認の相に規制されつつ行動するのであり、社会的・歴史的な行為の現実的遂行、従って、歴史の歴史としての進展は、当事者たちの日常性における“物象化的錯認”を謂わば積極的な構造的契機としているからである。」 58P

「諸関係の総和としての社会をつねに主体として表象していなければならないという言明は、しかし、つねに社会を主語にして論じなければならないという謂いではありえない。個々人を主語的当体として論ずる場合でも、それら個々人が窮局的な実体的主体なのではなく、賜与関係の結節として存在していること、真の主体的当体は関係態であること、このことを表象していなければならないという注意的言明と思われる。」 59P

「個体の行動と呼ばれるものは、当の個体の絶対的に自律的・内発的な活動なのではなく、彼を“項”的結節とする諸関係（対自然的・間（「かん」のルビ）人間的諸関係）の“網”の動態が彼“結節環”において発現したものである。」 60P

「実態においては、その個体的主体は自己完結的・自存的な起動的主体なのではなく、そ

の個体に一定限の能動的主体性があるにしても、真の能作的主体は社会的関係態の一総体にほかならないことが省察される。」60P

「物象化論の構制はこの事の省察に立脚するものであって、それは疎外論が拠って立つ「主体—客体」図式を止揚し、いわゆる主体的なものの客体化ではなく、関係態の物象化であることを対自化する。但し、関係の物象化というのは、関係なるものが自己運動的に物象に転化する謂いではない。社会的に諸関係(これは単なる“主体的なもの”ではないこと、主—客図式に妥協した言い方をすれば、これはすでにして“主体的かつ客体的”な定在であることに留意されたい!)に内存在する個人の日常的意識にとって、彼を“一項”とする対自然的・人間間的な当の諸関係が、そのような如実の関係態としては覚識されず、物象の相で映現することの謂いである。(「物象化」そのことの定義については本書二六七頁参照)。」60-1P・・・疎外論が「主体—客体」図式から来ていることの押さえ

この項のまとめ的文「爰においては、いわゆる社会唯名論と社会实在論とが二極的な形態で自存的実体と錯認する「個人」も「社会」も俱に関係の第一次性に即して把え返されていることと相即的に、個人も社会も自己運動する起動的主体と認められない道理であって、“大循環”であれ、“小循環”であれ、原理的な次元では、実体的主体の自己疎外・自己獲得という論理構制、遡っては、疎外論の拠って立つ「主体—客体」図式そのものが、その真実態に即して対自的に止揚されるに至っている。」61P

### 〔三〕 若干の予註的議論を挿み、次章への橋渡し

前項の整理「疎外論の物象化論による止揚ということは、物象化論が“物象化されざる状態・物象化された状態・物象化を克服した状態”の歴史的・段階的継起という主張を直截に含意するものと受取られてはならない。物象化論は、なるほど、或る種の物象化現象に関しては、その未在・現成・解消を歴史的事実の問題として立言する。がしかし、物象化論は疎外論の歴史的三段階構図をそのまま踏襲するものではない。このことは本書

〔一〕項において上述してところに鑑みればここであらためて絮言するには及ばないであろう。——物象化のあれこれの形態は特定の歴史段階に固有であるにしても、物象化という機制は歴史貫通的であり、そのことに俟って、単なる諸個人の営為の代数和には還元できない歴史としての歴史も成立しうるのである。」61-2P

(この項の問題設定)「われわれは、ここで、物象化論の構制とそれに即した歴史的法則性の存立機制についての主題的な討究へと立進む前に、通俗的な“物象化”論とマルクスのな「物象化」論との相異性を顕揚しつつ、遡っては、疎外論と物象化論との連続性・不連続性の問題など、若干の予註的議論を挿み、そのうえで、本稿に一応の区切りをつけ、旁々次“章”[本書、第Ⅱ章「物象化論の構制と射程」]における主題的な討究への橋渡しを期したいと念う。」62P

「偕、「物化」(Verdinglichung)とか「物象化」(Versachlichung)とかいう概念は、——今ここでは、シェリングの Be-dingung や初期ヘーゲルの das-zum-Dinge-Machen といった用語法との概念史的な脈絡といった問題には一切立ち入らずに話を運びたいのだが——ルカーチによって顕揚されるまで、マルクス主義者たちのあいだでは忘失されてきた看があった。これらの用語は、むしろ、新カント学派のハインリッヒ・リッケルトやマックス・ウェーバー、それにまた、ゲオルグ・ジンメルやエルシスト・カッシーラーなどにおける

用例を通じて、折々に眼を惹くようになっていた。」62P

「筆者としては、論者たちの固有の用語法に節介する存念は毛頭ないが、少なくとも、後期マルクスの物象化概念は初期マルクスの(ヘーゲル学派的なその大枠内にあった)疎外概念とは——概念形成史上の事実過程ではもちろん連続的な経緯がありはするが——、明確に区別さるべきものと了解しており、論者たちにおいて「疎外」と「物象化」とが大同小異とされる所以のものは、論者たちにおける(「疎外」概念がヘーゲル学派的な論理構制を殆んど慮外に措いている概もさることながら)“物象化”概念が依然として「主体—客体」図式の枠内で“主体的なものの客体的定在化”という構図で措定されているところにあると思う。」63P・・・こここのところ重要！物象化論は、青年ヘーゲル派内論争と近代哲学の「主体—客体」図式の総括をかけた議論の中で生まれてきた概念です。エンゲルスがマルクス主義の第一解説者として「哲学の死」を宣言して、マルクス思想のヘーゲルへの先祖返りの踏み外しに入ってしまったのは、物象化論の意味を押さええなかったからではないでしょうか？

「惟うに、人々が“物化”ないし“物象化”ということ語るさい、——旧著においても誌したことであるが——普通に次のごとき三層が主として表象されているように見受けられる。／(1) 人間そのものの“物”化——たとえば、人間が奴隷(商品)として売買されるるか、単なる機械の付属品になってしまっているとかいうような状態。ここでは、人間(さしあたり他人)の在り方が「人格」としてではなく、事物と同類のものに映じ、事物と同様なものとして扱われる状態になっているという意味で「人間が物的なものになってしまっている」と看ぜられる。／(2) 人間の行動の“物”化——たとえば、駅の構内での人の流れや満員電車のなかでの人々の在り方など、群衆化された人々の動きが個々の成員の意思では左右できなくなっているような事態の謂いであり、これは或る理屈を経て、行動様式の習慣的な固定化にも通ずる。ここでは、本来人間の行動であるところのものが、個々の自分ではコントロールできない惰性態になっており、主体的意思行為に対して“自存的抵抗性”をもつようになってきているという意味で「人間の行動が物的な存在になってしまっている」とされる。／(3) 人間の力能の“物”化——たとえば、彫刻とか絵画とかいった芸術的作品や、俗流投下労働価値説的に考えられた商品価値など、ここでは、元来は人間主体に内在していた精神的・肉体的力能が、謂わば対外に流出して物的な外在的存在になって凝結するとでもいった意味あい「人間の力能が物的存在になっている」と表象される。／これら“常識的な”物象化＝物化の想念においては、主体(人間)と客体(事物)という二元的区分の図式が前提にあって、「主体的なものが物的なものに転化する」という発想で“物化”が表象されている。すなわち、(1)では、実体的主体たる人間存在が商品とか機会の附属物とかいった物的な存在に転化、(2)では、人間の主体的行動が惰性態という物的存在に転化、(3)では、人間の主体的力能が物的に対象化され、物的な存在に転化しているという具合に考えられているわけであって、文字通りの現実的な転成ではないにしても、概念上は「主体的なもの」が「物的なもの」に「転化」していると捉えられていると言えよう。」63-5P

「後期マルクスの謂う「物象化」は、主体的なものがストレートに物的な客体的存在へと転成するといった「主体—客体」図式に立脚した発想ではなく(もしやそうであるならば、成程、物象化とは「疎外の一形態」ということになるが)、それはわれわれ流の言葉でい

例えば、「関係の第一次性」という存在了解に定位しつつ、フェア・エスとフェア・ウンスという構制に俟つ規定態である。」 65P

「嚮の(1)(2)(3)との対比上、敢て卑俗な指摘から始めれば、マルクスの謂う物象化は人間と人間との間(「かん」のルビ)主体的な関係が“物の性質”であるかのように錯認されたり(例えば、貨幣のもつ購買力という“性質”)、人間と人間の間主体な社会的、関係が“物と物との関係”であるかのように倒錯視される現象(例えば、商品の価値関係や、多少趣きと次元を異にするが、「需要」と「供給」との関係で物価が決まるといような現象)などの謂いである。このさい、人間と人間との間主体的な関係といっても、それはもちろん、いわゆる対象的存在から引離された人間どうしだけの裸の関係ではなく、況んや、性的・反省的な認知関係ではなく、対象的活動における動力学的な関わり合いであり、機能的相互聯関であって、「対自然的かつ間人間的な動態的關係」である。」 65-6P

「人々の間主体的な対象関与的活動の或る総体的な連関態が、当事者的日常意識には(そして、また、システム内在的な準位にとどまっているかぎりでの体制内の“学知”)にとって、あたかも物どうしの関係ないしは物の性質ひいては物的対象性であるかのように映現するということ、このフェア・ウンスな事態、それがマルクスの謂う「物象化」なのである。」 66P・・・マルクスの「物象化」の定義

「こうして、近代哲学流の構図内で表象された“主体的なものの物的な存在への転化”、つまり、いわゆる「疎外論」の構図と類同的な俗流的“物化”という想念そのものが、実は間主体的な対象関与的連関態の屈折した仮現に幻惑されたものとして、対自的・批判的に剔抉さるべきもの、そして、時に応じてはその物神性(「フェティシズム」のルビ)の秘密を究明さるべき一与件たるにほかならない。マルクスは新しい存在観、革しい世界観の地平を拓きつつ、この“秘密”をも解明しうべき論理を構築したのであった。」 67P

「蛇足たることを憚らずに記せば、筆者は、初期マルクスの「疎外論」と後期マルクスの「物象化論」とのその拠って立つ地平の準位を異にするものとして段階的に区別し、「疎外」という概念と「物象化」という概念とを峻別する者ではあるが、しかし、形成史的過程における両者の関連性を無視する者ではない。この論脈において、筆者は最初期の拙稿「マルクス主義と自己疎外論」(一九六三年発表——拙著『マルクス主義の成立過程』に収録)このかた初期マルクスの疎外論をも極めて高く評価してきた。『経哲手稿』にみられるごとき疎外論とそれに立脚した壮大な体系的意思の階梯を抜きにしては、後期の体系はおそらく、事実の問題として、成立しえなかったであろうと思われる。」 67-8P・・・思想形成過程としては押さえる必要があるにせよ、パラダイム転換というところでは、まさに「蛇足」になっています。

「後期の物象化論へと推転しうる構図だけは、すでに『経哲手稿』においてもすでに存立した、ということもあながち不可能ではないのである。」 68P と廣松さんは書いていて、「形成史的にみれば、疎外論の地平から物象化論の地平への飛躍、これがまさしく唯物史観の視座の設定と相即する。——この唯物史観は、しかも、狭義のいわゆる“歴史”観ではないこと、それは、単にまた「同時に社会観でもある」といっただけでは尽くせないこと、それは、或る意味ではマルクス主義の世界観そのものであるということ、このことは本稿の頭初において先取(註)的に立言しておいた通りである。」 69P・・・唯物史観と物象化論の



## 関係の押さえ

『ドイツ・イデオロギー』におけるフョイエルバッハの自然観の論攷に関する文の引用を受けて、「この「歴史化された自然」、そして物象化的に「自然化された歴史」という思想は、これまた先に第一節で一瞥した『聖家族』の或る条りにおいて、「人間から切り離して形而上学的に改作された自然」ならびに「自然から切り離して形而上学的に改作された精神」を両面的に批判しつつ、これら両者の一方をそれぞれの原理とする一面的な立場を弁証法的に止揚する見地を標榜するという形で、萌芽が兆していた。それが今や『ドイツ・イデオロギー』においては、「対自然的かつ間(「かん」のルビ) 人間的な諸関係」の生態系的(「エコシステム」のルビ) 編制の基軸を「生産」という実践の場に見据えつつ、実現への途に就く。」70P

「かかる視座に立つ以上——第二次的な下位分類としてならば話が別になるが——原理的な場面では、自然観と歴史観とはもはや両半球的に併立すべくもないのであって、「歴史化された自然」の一総体を射程に入れる唯史観が、世界観そのものと相覆う所以が納得されよう。」71P

「省みるに、近代哲学・近代諸科学、遡っては、近代的世界観は、いわゆるデカルト流の近代的パラダイムの地平の埒内にあって、諸々の二元的対立性の Wechselspiel[隆替劇]に捲き込まれてきた。この近代的地平を超克しようとする試みが、或いは“ロマン主義的反動”という形で、或いは能動的実体の自己疎外的二極分裂の自己回復的再統一という構制に拠るヘーゲル主義的な企図という形で、十九世紀早々に開始されたのであったが、その成就には程遠かった。しかるに、マルクス・エンゲルスは、近代的世界観のヒュポケイメノン(基底)をなす「人間」の本質的規定の把え返しを介して存在観プロパーの新地平を拓き、「歴史化された自然」「自然化された歴史」を依って以って成立せしめる所以の「対自然的かつ間人間的動態的関連態」の編制基軸たる「生産」関係に定位しつつ、新しい世界観、「自然史と社会史とを統合する単一的体系知(「ヴィセンシャフト」のルビ)」の Grundverfassung(憲法)たる唯物史観を確立し、そのことに俟って、物質と精神、客観と主観、本質と実存、……自然と人間、……等々の二元的対立性の地平を超克する地歩を固めたのであった。」71P

「マルクス・エンゲルスの拓いた唯物史観の地平は、まさに、近代的世界観のそれを止揚する現代的世界観の新地平であって、われわれとしては、革らしいパラダイムを開示する劃時代的な Auffassung(見解)として「唯物史観」を宣揚する次第であるが、この唯物史観が「われわれにとっての自然」(Natur für uns)、「歴史化された自然」の存立構制、ならびにまた、社会的・歴史的・文化的諸形象、つまりは「自然化された歴史」の存立構制、これら統一的に把握しうる所以の構制、それこそが「物象化論の構制」にほかならない。」

## 71-2P

「われわれとしては、爰に、「唯物史観の宣揚」に具象性を保証しえんがためにも、ヘーゲル学派流の「疎外論」の内在的止揚を通じて確立された「物象化論の構制」を主題化し、その「射程」をも眺望することを次の段取りとする。」72P

(註) この「取」には「あなかんむり」が付いています。『弁証法の論理』の目次でも出

てきた漢字ですが、打ち込めません。指摘に止めます。

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 155 号」アップ(24/8/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページに不備・加筆することがあり、昨年かなり大幅な更新をしました。「今後の課題」など関心をもってもらえる方は、読んでもらえると思います。<http://www.taica.info/kaikadai2.pdf>
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」で見れなかったところをチェックして一部修正して再アップしました。今のところ、全部見れるようになっています。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年5月の末に1年余ぶりにリアップしました。
- ◆メインホームページ「反障害—反差別研究会のHP」のIV. F [廣松ノート] <http://www.taica.info/hiromatunote.html>に『弁証法の論理』をアップしました。

## (編集後記)

- ◆月二回発刊は今年一杯は維持する予定です。来年は、宿題執筆と並行して進めようと考えているので、月一に戻すことも考えています。
- ◆巻頭言は、「社会変革への途」の草稿的文で、四つのテーマから提起して行くことで、その最終回。反環境破壊、未来に生きる世代からのその土台・環境の破壊・収奪の問題です。
- ◆読書メモは、[廣松ノート(6)]の『物象化論の構図』に入りました。これが「通信」で5回分。その後に、積ん読をしていた本6冊分一挙掲載が1回。そして、[廣松ノート(7)]の『存在と意味 第一巻』に入ります。これは、11回に分けて掲載予定。今、ノート取りが、3回分まで行っているところ、このメモとりが今年いっぱいまでかかりそうです。その後、[廣松ノート(8)]の『存在と意味 第二巻』に入ります。このメモ取りが来年3月までには。掲載は、月二発刊にしても、来年一杯はかかりそうです。宿題執筆を始めるとして、月一にすると、先の長さにぞっとしてしまいます。
- ◆イギリスの暴動、ヨーロッパの右派の台頭、ウクライナ戦争の拡大、イスラエルのジェノサイド的戦争の拡大。地震に大雨。何が問題なのか、それなりに押さええて、発信を続けているし、していくしかないのですが、基礎理論的学習から、具体的な提起のようなことに踏み込んでいかなくはと念い、それでも自分の発信力の弱さ・「無力さ」を痛感しつつ、焦っています。できることをできることからやっていくしかないのですが。

## 反障害－反差別研究会

### ■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害－反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>